

帝国ホテルは盗作か

——建築家フランク・ロイド・ライトによる日本建築の盗用

修論最終発表会 2020年2月4日
建築史中谷研究室 修士三年 重本大地

目次

はじめに

序論

第1章 幻の帝国ホテル——下田菊太郎設計案

- 1.1 ライトの盗作疑惑
- 1.2 下田菊太郎とは誰か
- 1.3 ライトと下田菊太郎
- 1.4 下田菊太郎と帝冠様式
- 1.5 国際連盟設計競技（1926年）——下田菊太郎応募案
- 1.6 問題提起——帝国ホテルは盗作か

本論

第2章 ライトと日本——これまでの研究

- 2.1 ライトと日本の深いつながり
- 2.2 ケヴィン・ニュート『フランク・ロイド・ライトと日本文化』
- 2.3 ライトと日本をめぐる人間関係

第3章 ライトと日本——権現造りの影響

- 3.1 守——権現造りからユニティ・テンプルへ
- 3.2 破——権現造りからグッゲンハイム美術館へ
- 3.3 離——権現造りからユースニアン住宅へ

第4章 ライトと日本——浮世絵の影響

- 4.1 浮世絵蒐集者としてのライト
- 4.2 浮世絵の影響

第5章 ライトと日本——その他の影響

- 5.1 塔と伽藍配置

考察

第6章 ライトと安藤忠雄——日本建築の中空構造

- 6.1 鉄筋コンクリート
- 6.2 建築の実体としての空間——老子と岡倉覚三の思想
- 6.3 日本建築の中空構造——ルイス・カーンとの比較

第7章 ライトの盗用原理——建築の「型」

- 7.1 「様式とは何か」という問い
- 7.2 「物的・構築的」建築と「空間的・行為的」建築
- 7.3 建築の「型」と「形」
- 7.4 ライトとピカソ——トポロジカルな変形

結論

第8章 帝国ホテルは盗作か

- 8.1 設計者交代の経緯
- 8.2 帝国ホテルライト館と鳳凰堂
- 8.3 帝国ホテルライト館とマヤ・インカ
- 8.4 結論——帝国ホテルは盗作か

謝辞

参考文献

図版出典

背景と目的

ライトへの日本からの影響は、ライトに関する最も早い批評文からすでに指摘されていた[13]。ライトが日本から影響を受けていることはその後も多くの研究者たちによって自明のこととして扱われたが、実際にライトがどのように日本から影響を受けていたのかを具体的に詳しく体系的に論じたのは、ケヴィン・ニュートによる1993年の著作『フランク・ロイド・ライトと日本文化』[8, 23]が初めてだった。そこで明らかにされた数々の影響のうち、特にユニティ・テンプルにおける権現造りの活用は、筆者にとって、まさに「盗用」としか言いようのないものだった。

本研究は、ライトが「盗作」の疑惑をかけられている帝国ホテルの例を軸に、その他の様々な事例からライトの建築設計における「盗用」の原理を明らかにし、帝国ホテルの盗作問題に決着をつけることを目的とする。

なお、本研究では一貫して、設計における創造的方法としての「盗み」を「盗用」と呼び、非難されるべき犯罪的行為としての「盗み」を「盗作」と呼ぶ。もちろん、両者の境界はときに曖昧となる。

序論

第1章 幻の帝国ホテル——下田菊太郎設計案

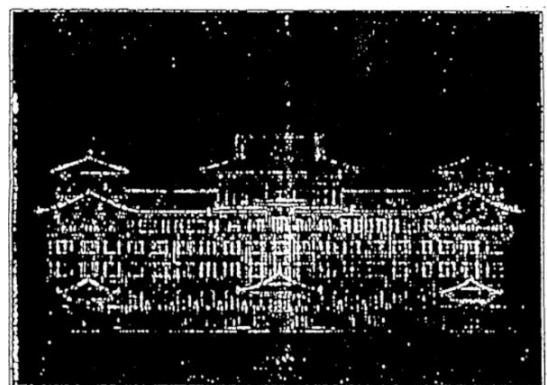


図1：下田菊太郎によると推測される帝国ホテル設計案（1912年）

★この章の目的

建築家下田菊太郎が主張するライトの盗作疑惑に関する資料を集め提示する。

★この章の概要

下田菊太郎は、1928年の著書『思想と建築』のなかで、次のようにライトの盗作を主張する。

ライト氏は米國技師として他人の考案を竊取する意志なき事は余も信ずるところなるが、帝國ホテル重役は余が考案を彼れをして直寫實施せしめたるならん、ライト氏は住宅技師として有名なるが大ホテルを考案せしことなし。此

の最初の余が考案を確かに直寫したものと断言するの外なきなり。([19] p.61 (右開き))

下田によれば、後に帝国ホテルはこのことを認め、下田の「相当なる要求」を受け入れたという。

下田によって描かれたと推測される図1の立面図のほかに下田による帝国ホテル設計案の図面は何も残されていないが、下田自身の記述によると、それは平等院鳳凰堂をモチーフにした帝冠併合式の計画だった。もし本当に図1が下田によって描かれたものであれば、この図は現存する最古の帝冠様式の建築図面ということになる。

後の章で述べるように、ライトによる帝国ホテルは1893年シカゴ万博日本館の鳳凰堂を下敷きにしたものであり、下田の設計案と似たものであった可能性は十分にある。また、1926年の国際連盟設計競技に下田が応募した設計案の平面(図2)は、帝国ホテルライト館と酷似している。

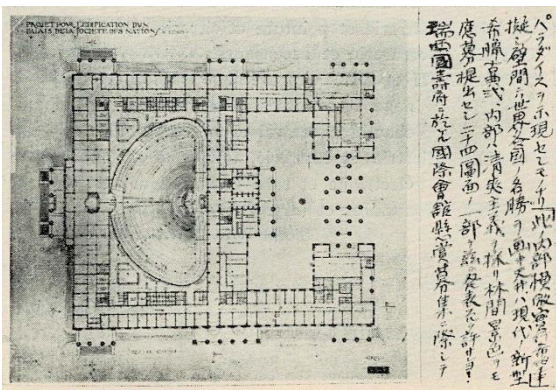


図2: 下田菊太郎による国際連盟設計競技応募案平面図

本論

第2章 ライトと日本——これまでの研究

★この章の目的

数々の歴史家たちによるこれまでの研究をもとに、ライトと日本とのつながりとこれまでに指摘されたライトへの日本からの影響の概略をまとめる。

★この章の概要

日本がアメリカとカナダ以外にライトの作品が実際に建設された唯一の国であることからわかるように、日本はライトにとって特別な国だった。早くはグラント・マンソン[6]がライトへの鳳凰殿の影響を指摘し、ヘンリー・ラッセル・ヒッチコック[2]、ヴィンセント・スカリー[10, 11]、クレイ・ランカスター[4]らもライトへの日本からの影響を取り上げた。日本では、谷川正己[21, 22]が長年にわたりライトの執拗な研究を続けた。しかし、ライトと日本との関係が具体的かつ体系的に初めて論じられたのは、ニュートによる1993年の著作においてであり、浮世絵蒐集者としてのライトは、ジュリア・ミーチ[7]の研究により徐々に明らかにされていった。

ライトがはじめに日本に興味を持つきっかけをつくったのは、おそらく、アーネスト・フェノロサのいとこでありライトの最初の雇い主でもある建築家ジョセフ・ライマン・シルスビーであった。この、フェノロサ、シルスビー、エドワード・モース、ジョン・ラ・ファージ、アーサー・ダウ、フレデリッ

ク・W・グーキン、スポールディング兄弟、執行弘道、岡倉覚三、九鬼隆一らを取りまく人間関係のネットワークは、ライトと帝国ホテル支配人の林愛作をもとりまいていた。

第3章 ライトと日本——権現造りの影響

★この章の目的

谷川やニュートによる研究を基盤として、ライトが日本の文化や芸術から受けた様々な影響のうち、「盗んだ」という言葉が最もよくあてはまる権現造りの「つくりかえ」を吸収の三段階に分けて紹介する。

★この章の概要

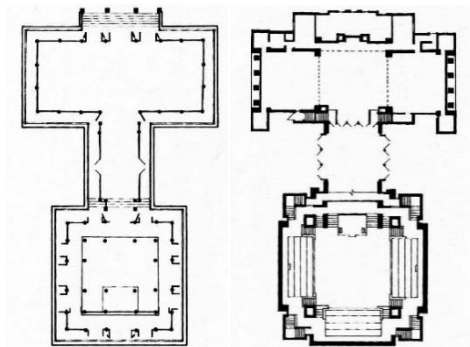


図3: 大猷院御本社(左)とユニティ・テンプル(右)

ライトは1905年に初めての日本旅行に出かけており、その後設計されたユニティ・テンプルの平面図は、日光山輪王寺大猷院御本社の平面図と酷似している。これほどの酷似とあっては、ライトが大猷院そのものの図面を直接に参考したと考えるのが自然だろう。本来「チャーチ」であるはずのこの教会建築が「テンプル」と呼ばれているのも、通常神社建築の多い権現造りにあって珍しく仏教の建築である大猷院を下敷きしているからかもしれない。

大猷院とユニティ・テンプルのどちらもが宗教的な建築であり、ふたつあるヴォリュームの片方は聖なる空間に、もう片方は俗なる空間に使われていることを見ると、ユニティ・テンプルに権現造りの平面を適用したことは、機能的にも理に適ったものであったことがわかる。権現造りの建築では、本殿と拝殿をつなぐ間の通路に神職者あるいは僧侶が使用するための出入り口が設けられているが、ふたつのヴォリュームをつなぐ通路に入り口があることはユニティ・テンプルも同様である。

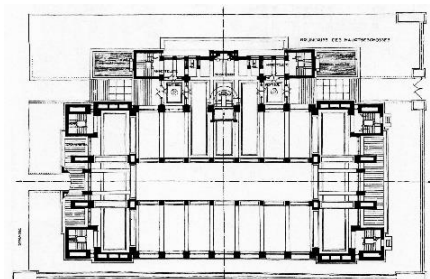


図4: ラーキン社ビル

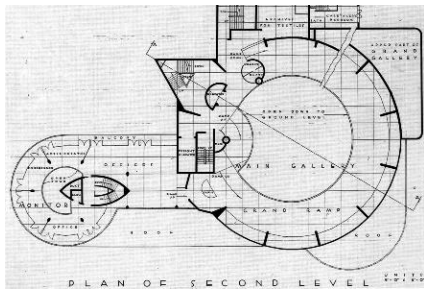


図5：グッゲンハイム美術館

ユニティ・テンプルにおいてはほぼそのままに権現造りの形とプロポーションを写し取っていたが、1904年設計のラーキン社ビルや晩年のグッゲンハイム美術館では、本殿・相の間（石の間）・拝殿という権現造りの空間の関係性はそのままに、より自由な平面へと変えられている。ラーキン社ビルがユニティ・テンプルよりも早かったのは、ライトが日本はあくまでも「確証」にすぎなかったと述べていることの証拠かもしれない。

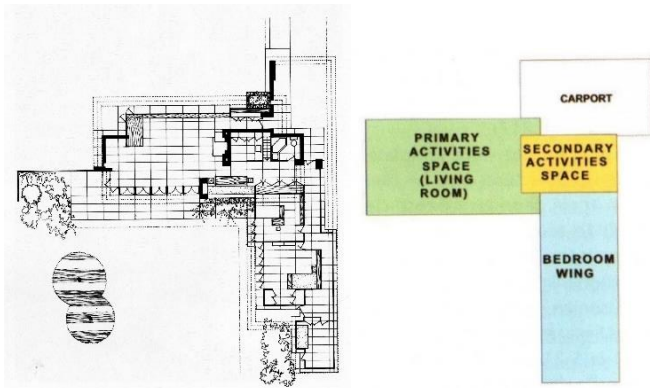


図6.7：ジェイコブス邸Iの平面図とそのダイアグラム

さらに、ライトによる権現造りの平面利用はユーソニアン住宅においてより柔軟に進化する。ウィリアム・アリン・ストラ[14]が権現造りとは無関係に指摘する通り、第一のユーソニアン住宅であるジェイコブス邸Iでは、リビングなどのパブリックな空間と寝室などのプライベートな空間、そしてそれらふたつの空間をつなぎ出入口と接する第三の空間とからできている。ジェイコブス邸Iは、ふたつの長方形平面が垂直に交わるという最もシンプルな形式をしていたが、この平面は、百以上あるその後すべてのユーソニアン住宅によって引き継がれ、空間の関係性はそのままに形の複雑性を増すのである。

第4章 ライトと日本——浮世絵の影響

★この章の目的

ライト自身の言葉やミーチによる詳細な研究をもとに、ライトが浮世絵から受けた影響を、思想面と視覚面の両面において紹介する。

★この章の概要

ライトは、おそらくはシルスピーの影響で浮世絵やその他の日本美術に興味を持ち始め、1905年に行なった初めての日本旅行から本格的に浮世絵の蒐集を始めた。ライトにとって浮世絵は、芸術的なインスピレーションの源泉としてだけでなく、経済的危機から脱出を図る手段としても重要だった。ときには、

浮世絵をめぐる人間関係がライトに本職である建築家としての仕事をもたらした。帝国ホテルの場合がそうである。

ライトは、蒐集者の特権として、浮世絵に直接補助線を書き込むなどしながらその美学を吸収した。同様に、自身の建築に合うように日本から持ち帰った襖を切り刻んで壁にはめ込んでしまうことなどもあった。

第5章 ライトと日本——その他の影響

★この章の目的

前三章で紹介することのできなかった、その他のライトへの日本からの影響のうち、次章以降の考察に特に関わるものを紹介する。

★この章の概要

前章までに述べたもの以外に日本からライトへの影響のうち次章以降の考察内容と深く関わるものは、日本の社寺建築からの塔と伽藍配置の「盗用」である。

ジョンソン・ワックス社研究棟と薬師寺東塔との類似は、はじめランカスターによって指摘された。その後、気づく人は多いのではないかと筆者は想像するが、ジョンソン・ワックス社全体の計画と法隆寺伽藍との類似がジョナサン・リップマン[5]によって指摘された。

その他にも、ライトの作品は住宅には左右非対称のものが多く、住宅以外の作品には左右対称のものが多いことが一般に知られているが、その住宅以外の作品の多くは、自由学園明日館などをはじめ、平等院鳳凰堂や興福寺など日本の社寺建築の配置を思わせるものが多い。

考察

第6章 ライトと安藤忠雄——日本建築の中空構造

★この章の目的

主に第3章の内容をもとに、ライト、ルイス・カーン、安藤忠雄の三者の比較から日本建築のひとつの特徴を考察する。

★この章の概要

鉄筋コンクリート打ち放し仕上げの一体建築として世界でも最初期に建てられたユニティ・テンプルやその他のライト作品、例えばモリスショップなどは、コンクリートの使い方、細長いスリットの開け方、都市での外部に対する閉め切り方、老子や岡倉覚三[9]の思想とも通ずる内部空間の考え方などの点において、直接的あるいは間接的に安藤忠雄へと受け継がれた。

しかし、ライトと安藤の建築における最も重要な共通点は、権現造りの平面、すなわちふたつの大きな空間とそれをつなぐ第三の空間からなる平面形式の利用である。ライトにおいては、すべてのユーソニアン住宅とそのほか多数の作品に、安藤においてもほぼすべての作品にそのような特性が見いだせる。安藤が双子として生まれたことから安藤の建築は「2」という数字と結びつけられて語られることが多いが、実際には「3」こそが安藤建築における重要な数字である。河合隼雄[18]は日本の神話に中空構造を見出し、その視点から日本の社会や文化の様々な現象を論じているが、権現造りをはじめとする日本建築の一面にもこの中空構造が見られるのではないだろうか。

このことは、日本との関わりの薄いルイス・カーンによる例えばフィッシャー邸などと比べるとわかりやすい。ライトはアメリカ人でありながら、日本建築を学び権現造りを「盗用」することによって自然と建築に中空構造を持ち込むことを学び取ったのではないか。

第7章 ライトの盗用原理——建築の「型」

★この章の目的

西洋建築と日本建築との様式概念の違いを鍵として、ライトによる「型」の盗用と「形」の創造を考察する。

★この章の概要

新しい建築を設計するために過去の様式を選び取る行為は、まさしく「盗作」そのものではないだろうか。歴史上の名建築を模倣することが当然のこととして認められ、同時代のほかの芸術家の作品を模倣することが認められないのには、芸術とは何かという問いや著作権という概念に関する「常識」がある。しかし、ピカソ[20]やデュシャン、そしてライトなど20世紀の芸術を大きく推し進めた人々がそれぞれの芸術を追求するにあたって、それらの常識は打ち壊さなければならないものだった。筆者は、ライトの「盗用」する能力が日本建築に対して最もよく発揮されたのには、西洋と日本における様式概念の相違、ひいては建築そのものが持つ特徴の相違があると考えた。

浜口隆一[24]は、西洋建築は「物的・構築的」であり日本建築は「空間的・行為的」であることを論じている。これを菊竹清訓の「か・かた・かたち」論やルイス・カーンによる“form”と“shape”の違いに関する理論などと合わせれば、西洋の建築様式は「形」に、日本の建築様式は「型」にその重要性が置かれていると言えるのではないか。

ピカソが他者の作品から絵画の構成を剽窃しそれをもとに自在な変形の遊戯を行なったように、ライトは建築の「型」を日本建築に求めることによって芸術家の本分である「形」の創造と全体の統合に集中することができた。

結論

第8章 帝国ホテルは盗作か

★この章の目的

序章の内容をふまえ、帝国ホテル新館の設計者が下田からライトへと変更される経緯をつぶさに検討するとともに、前章の考察をふまえ、ライトの帝国ホテルにおける「盗用」の内容を評価し、「帝国ホテルは盗作か」という問題に結論を与える。

★この章の概要

ライトが建築のアイデアや意匠における盗作を行なったか否かという問題をひとまずおけば、下田の図面が紛失している事実や、林愛作を取材した黒田鵬心[25]の新聞記事の内容などから判断して、少なくとも下田にとって、帝国ホテル設計案の図面そのものは林愛作によって文字通り「盗まれた」と言ってもよい。下田の設計案をライトが目にした可能性も十分にある。

しかし、皮肉なことに、林と武田五一との間の手紙[17]から推測されるように、そもそも、帝国ホテルの雛形として平等院鳳凰堂を用いることは、下田ではなく林の案であった可能性が高

い。つまり、下田にもライトにも建築の「型」を与えたのは林であった。ただし、ライトはそれを、彼にとってより身近だったシカゴ万博日本館の鳳凰殿に置き換えている。

そして何よりも、鳳凰殿の「型」を下敷きにした帝国ホテルライト館は、ライトによるものとしか言いようのない独自に統一された意匠によって覆われていた。本人はそれをマヤ文明から取ったものだと言うけれど、それは日本建築の「型の盗用」を隠蔽しようとする言い訳にすぎなかったのではないか。

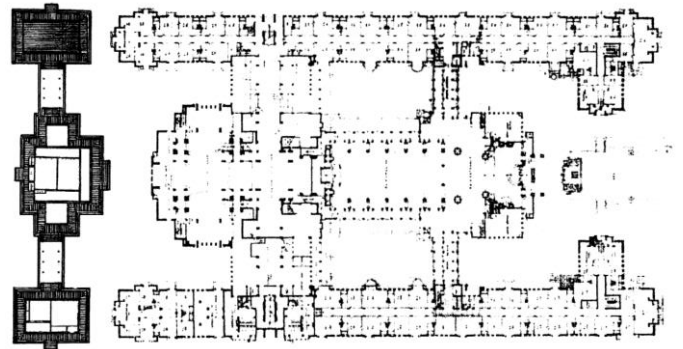


図8：鳳凰殿（左）と帝国ホテルライト館（右）

参考資料

- [1] Edited by Birk, Melanie. *Frank Lloyd Wright's Fifty Views of Japan: The 1905 Photo Album*. Pomegranate Artbooks, 1996. [2] Hitchcock, Henry-Russell. *In the Nature of Materials: The Buildings of Frank Lloyd Wright 1887-1941*. Da Capo Press, 1975. [3] "A New Imperial Hotel: Management Plans to Have 'Best East of Suez Canal.'" *The Japan Times*, February 3, 1912, p.1, 4. [4] Lancaster, Clay. *The Japanese Influence in America*. Abbeville Press, Inc., 1983. [5] Lipman, Jonathan. *Frank Lloyd Wright and the Johnson Wax Buildings*. Dover Publications, 2003. [6] Manson, Grant Carpenter. "Frank Lloyd Wright and the Fair of '93." *The Art Quarterly*, Vol.16, No.2, 1953, pp.115-123. [7] Meech, Julia. *Frank Lloyd Wright and the Art of Japan: The Architect's Other Passion*. Japan Society and Harry N. Abrams, Inc., Publishers, 2001. [8] Nute, Kevin. *Frank Lloyd Wright and Japan: The Role of Traditional Japanese Art and Architecture in the Work of Frank Lloyd Wright*. Chapman & Hall, 1993. [9] Okakura, Kakuzo. *The Book of Tea*. Dover Publications, Inc., 1964. [10] Scully, Vincent J. *The Shingle Style and the Stick Style: Architectural Theory and Design from Downing to the Origins of Wright*. Yale University Press, 1971. [11] —. *Frank Lloyd Wright*. George Braziller, Inc., 1960. [12] Sergeant, John. *Frank Lloyd Wright's Usonian Houses: Designs for Moderate Cost One-Family Homes*. Watson-Guptill, 1984. [13] Spencer, Robert C., Jr. "The Work of Frank Lloyd Wright." *Architectural Review*, June 1900. [14] Storrer, William Allin. *The Architecture of Frank Lloyd Wright: A Complete Catalog Fourth Edition*, 2017. [15] —. *The Frank Lloyd Wright Companion Revised edition*, the University of Chicago Press, 2006. [16] Wright, Frank Lloyd. *Drawings and Plans of Frank Lloyd Wright: The Early Period (1893-1909)*. Dover Publications, Inc., 1983. [17] 足立裕司「帝国ホテル建設経緯に関する一考察——武田五一研究(3)」日本建築学会大会学術講演梗概集、1988年、pp.793-794 [18] 河合隼雄『中空構造日本の深層』中央公論新社、1999年 [19] 下田菊太郎『思想と建築』私家版、1928年 [20] 高階秀爾『ピカソ 剽窃の論理』筑摩書房、1995年(1964年初版刊) [21] 谷川正己『ライトと日本』鹿島出版会、1977年 [22] —「公表されていた下田菊太郎の帝国ホテル設計図(Frank Lloyd Wright 研究・174)」日本建築学会関東支部研究報告集第66号、1996年、pp.425-428 [23] ケヴィン・ニュート著、大木順子訳『フランク・ロイド・ライトと日本文化』鹿島出版会、1997年 [24] 浜口隆一の本刊行会編、浜口隆一著『市民社会のデザイン——浜口隆一評論集』而立書房、1998年 [25] 鵬心生『日本趣味の大建築——帝国ホテルの新築計画』『讀賣新聞』1911年12月10日、朝刊、p.5

図版出典

- 図1：[3] p.1. 図2：[19] p.80（左開き）。図3：[1] p.96. 図4：[16]. 図5：[15] p.431. 図6：[12] p.17. 図7：[14] p.xxii. 図8：[23] p.172.